崇文製錦

謹二

五

藝文叢錄卷四目錄

卷二

容顏 卅一　風 廿五

人情 廿五　懷舊 廿九

紫文製錦五巻

雑二

容貌

安藝　源　稲彦　撰

相壷十七ウ

絵をかける揚屋処

ぐもなまかざりあ

ければいやしき

女なれども大

夫

女芙蓉。未央柳

ちぐさのいたるよう

もいうべうもあり

なつうらうたげなり。帝のおがしいぢくみどころ
れなにもおまよう。
ロ（廿丁ウ）いみじきものくふべきかくごうき。
ゑまれぬべきさまのへれいえさうそうちあいべ。
ロ（廿七丁オ）みぢくるもむあつるはそうつきかおれまうもさまう人物
もりんことのちげかるこ
をむことをそげうり。
ハウ
○いかうかうまぎもそうるおどいあげおくうやとうたが
ぎーくおがさまれはるこ
すーくおがさまれはるこ。あさまう。つくげきそひ
ま

かのうえんてあつるだおりさう公方にもむだろを
おとくるすきさいそ
○おいきあやめ（七ツ前ヨリ）をもへがさねるあり。なにてろあふむう
へにまてくかうらをにきこうやうよちむさ此人ものげ
なきすぐろうもくかなどいさむろてぐむをと
ぶこともわざとカんゆまうもてなたりまつきやせ
やせるくいろう（お端折）。むきかくしたり、いまをとりハをんがし
むさまくのろうなくゆもろきうすのの
むとくがねめくあるよううちぎだもよまいぐろ

にさうくしなる、おくはまをうぐくしてろうなるをもかう
おうげようぐくとおくてろうなるをもかう
はそまむろつきさまあざやうまくちつきと
あぎやうづきそるやうなるかちなりかはいを
ふさやうてなうぐくはあくもとさろバくれろぐ
いとさよげすぐいと紙ちけるやくろなく
おうげする人と見てきりむべろおやけまる
くはおのもあをぉうくんのみさらぐなく

おぢぐなる（ママ）みをうへだものとみてゐんゆかぶくるまよ
はあるまじ。
（口）（五才）
〇すかいしたかるおいらもちして。鼻うごとあざやうなる
（おいせさん）
ほうこうねをかしくおりうきやうなもゐんでびっくり
ゐれしいろきてまゐるをかしくもてつけ
（新橋藝妓）
くおれまさるをとろあくむとあぶぐめ
ゐべきれまったり。
（ウ）
〇よぎいくあいぎやうづきおうしみるいいもく
かおりうようちをめくぐるとろばるしいおうい

（タ良廿丁オ）
〇もろきあをせうすをかくいとおうきをとざまるり。
なやうなるすぐこいおらうたげなあべうるようち
してそをとやうたてすぐしるることともなけしどかう
やうなたをくやしてゐんでいるけをもわなん
ぐるしくたでいとらうたくんぬ。
（よ宝ハ丁オ）
〇なるおそらうめぐうくれうへに経済
おきくいとなやまるあまぎたでをと
ぬくはゐんでびゐをもろくあてる

やせるれど。そこうつきみくらかまさんそどうこむうつ
くしげようがれうるすきもなろくなどきようもよ
るうい。まあうきりかあとえよみ。
ロ（紫上ニ）ウ
○十そうりやあふむとみてくぬやまぎきな
わなかるきくばーときたる女ごおまさみてきる
さむもに。ゆへくもあるべいうおこさ北みてそう
つくげるかこちるりかこいあみざとそろばるる
やうにゆくみてかいいとあかくすりなくく
たてり。

ロ（九オウ）
○はそつきいとらうたけてまゆみろうちみ
ついをけなくかいやそるそうむざーつこ
うはそくゆびゆもさまゆーさ人かなとあそ
まりのみ。
ロ（十オウ）
○をさみおくちてもさずるうちまのてみにに
るりて。うはぞたるおがれかうたるかつやそる
めでこうえゆ。
ロ（十三オウ）
○たぐあよかさたるうのよくおがごんやうまするあ
られくうちみでるさゆとともくくうはー

ゆえかむざーい姫のさしぎきとりみとそて。額の際ち頂のかくへ女のをのがさぜる伝のさまをいえなうとつつ。花五小橋にくり。

うてもよくまへばつ
□ニナウ
○すこしゝゝみくらかなるやうなるやうにおもひ
やせまつくるもこゝろぜよにろうみるくめでこゝ。
未描花サロナウ
○まろくかゝせぐらみれどゆきもおもうにこゝろいとぐきよ
らよわろうみてまつをもとめ老人ども。ゑさろそくく
凡一ゑまにろ。
□未描花芯ばかきし
○まいりぐけんろうをぜろのごよみてあつさし
ゑとむねつぶれねうちつぎてあるかこはこ凡ゆる
もれいろ。裏ろりみりとめろうやまろよいんろさち

ものゝやおがゞ。おさまうたろうのゑゝかな。
さゑのろすこたろうてあり。いろいろゆきそぜくくもろうてさそよ
にうこてあり。いろいろゆきそぜくくもろうてさそよ
ゑゝいつきさおよみうはんろうなおおもちなる
おりやうゞ大かろおとろくゝくなろきろべゝや
せまへることろゝわゝみ花ゞゞ
いろゝゝめろゝゝぬのろへまでこゞ。
□サムテオ
○紫ゑ。いろうつくきからおゑろくゝなお
はゞからうつくきをおりゞと凡ゆるもりんゑ松の

おろおがなくてなるんとうくてり外
のみさま、うらうらたしておいめおいあのまた
引にくたびろめもまでかりけるとえきつくろは
せあへしがまいめけざやうなるもうそくう
きまうなり。
（仁系統八十オ）
○いりうまでて、いろいうなるむまつる
と女まくんむ、おうかりやづくへもしずこうそま
はうのみもかうくむつまでうおがこうてまや
うにがりめでうるどきまくすみえもおれきうれ
（保氏系の一）

つくろうとよ。ようこうこうちとみあつるとこ。おうめく
たしとんうてまそうあて。むおよおとおりくで。
女よてんもやと。
（十八十オ　保氏系の一）
○もゆうくうちてくこあつるえんくきあされる
うちぎすくたて笛をうこうきすきむつくのう
きあへしを女あうはうの孔はあにめかくるさ
ろえでまつうさ。うそうらうたけうおい
きやうさうくやうそおうなうやくも扱つ
ねなまうくめかりけれしい例なるくむきかつる水

（源氏名のり）
へ〜はゝのうへ、おとゝのおもとおはしまして、
いりもみいうのとき、
いうこうされてうくしあるにくかくろふくちゐれ
（源氏見初）
ゐ
ゐ（廿二丁ウ 源氏名のり）
○ゐなかおとこうしもいかゞなる
（源内侍のすさう）
ず能うきたるをとくてゐかつうたるまゝいうこと
のべたれどまゝいくもおちうていうくもづれ

（花宴十二オ）
○さくらゐなるゝきのかなり。えもいはずくむさきみ。
ざれうおかきこすぐみ人そうへのきやなるよ。あ
ゐにさるぴのいとおかしきなり。いうれいろ
てなるくたとざまにいな角。
（源氏名のり）
○姫ぎみといふくしぴよつくろむさおすする
（ルイオ）
□をうち名てゐそまいりますよ
（ルイオ）
○ゐろきれゐぴよのむいとそるやてぴぐいと
なぐうおちさゐむきゐてうちうへるとぴからぴ

ろうらうこびゃなきまあさんろうかくろうおろうかう
けしかんえんや。
口（廿四丁ウ）○げんなんなきばをがかうぃうぅぅつくき。
口（廿七丁オ）○余ろうろうろうめしくくくくうちなぐわまへるき
こすぅうちめしかまへうかでろうめでろうさ。
賢（十九ウ）○女ぅぅさまもげろうろうめでろうさかろうおうろ
かかろうかくいうぐあんおぐうみまめきやうぶろ
おくちーてこまりーきぃぃゆえむるり。
口（廿八ウ）○まぐちくむさーくおとをぐぃぃ返ってきりぃぃよく

まうぐぃぃおつんぃぃかんぃぃそづうぅぅとおがってきすぐようむきぃぃ
まつうぅぅぐーいゆうくぃぃきよぅぅにてくまぃぃぃなそうぃぃぃ

たるそう也ぞなと。ゆくく兄をりく泪おとしつく
ねくり。
（源ノ九十オ）
〇いつぶくれ月いとおうきるづとなまあうくうき
くにく。物がおがもうさとゆくおそくだよ
もなきぬべし。
（松陰三十ウ）
〇女ごんかいとあうくおうるもうれ
あいぎやうまで。泪をおしうをよつぼのつみ
わすれぐさ。ねにらうたしやづくむやう。
（口世十オ）
〇ゆくくらうなりちいおかやなかのうのうけ。

もれまりゆくりてみゆもゝとおうくてやゝ
らは木すれかうろづもうるべんとなゝ
れからげまはづしいとおうくてやゝ
まりぬるまつるあまよかきたくむさまして、いうもわ
それなり。すれ赤おりてまうもうるこうや
なうんかしは木すれもがけなくえきやうれるお
まりはめゆくめてみ兄とまりまへれいつぼえつき
て。いよ物かなのとおがいるさまなり。そはるもと
いやうろくびなるむと兄ゆわぐしすかくまるなど。

かゝらつきけりあてよけごろきもちよくなる
あいぎやうづきあゝるけをもちるくなてまへごろ
もとなくゆくきよもごろよもきごろのつまりのをとあ
かしかへし。
（生十一才未婚社会）
○ゆなきさかちよいやごおりあぼこかたごゝ
人もあるきおねこ記ともかゝよそるあと見て
まよ。ろうがめるごとさ。あごろけ人のなりゆる
すべきにもあうすうるかれいもごこねごろ。
（松包十九才）
○人こもかゝろいるがれいもごこねごろ。

丁にもさかくるかゝろあいゝうなまあいくばし
ありたをやぎたるけそでみそもとそもたた
つまぬごし。
（ロシ十九才）
○ロシさしねきれすうまで。なまあうあいぎやう此ごが
しいぼごあなごたちなるんなるべき。
（肖像を七十才）
○おれまきりあるこれおまろぼごとゆる
ゆゝことめぞくつゝ。
へいさゝなり。
（十丁才）
○たゞ姫ぎこれたすきゆもまつるむのきそう。佐

くしげきうそくなどみてゐる。
〇姫君（少女十八ウ）はさまのことなどいとこまかにかきあつめてにあまりあつきをうちまもりゐたまへるさまいとうつくしげなり。
〇ことばやさしくかきつづけたまへるをいとうれしくおもひてかざりなくかきつづけたまへるをものこしたまへたけくねこしく
記きまきまき記まひくおや
玉髪十才
〇三十ぢうなるをのこのたけくねこしく

ふとりそこさなげきなどしてゐたまへるをおくうなるあまどもみなどおりてきたりてさうぞくなどいそぎたちよばれたまふ。
〇なでうようたくしげなるうちにぞきものどもいとおほくもちあつかひてゐたまへるさまいとうつくしげなり。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。
〇うつくしげなるちごどもゆさうろぐるとうかるとてまはる。

はるのよのつかのまなどもうちとけゆるべきねたまし。
あつさこそわれはまさらめ。ゆふすずみ。
たもと。
○おかでとるものごとなどまゐりくうちとけゆるべきねたまし。（源氏をさす）
（廿十才）
○おかでとるものごとなどまゐりくうちとけゆるべきねたまし。（紫上）
しまひこれおりさまざまいとうるはしかり女ぶみ。
二十七八よりうへをもやうやうきこえうるはしだち。
むまさりすこしおとなびたるかたはまさりて。
おとどよりうへ。
初夏六十ウ
○さうじこもあるやまづさ。

りくとやしこのまつるおうちなどいとおほかるに。
くりかへしとかんゆるところなくくまなく匂ひさしこめ。
しくだんまりこきまぜたるおとなびたるかたはわざとやかれすこしほうてさは
こまつるおとなびたるかたはまさりて。
らくまかうもいとのどやかにおもしろくかうこそゆ
ざやうのさまをかくてだんざうまでかいかいお
りかすこしくだけたるかたはわざとやかれすこしほうてさは
○いまひとへ。
ろへもさまざまにわざとやかれすこしほうてさは

あくんとて。わらはかたへ。ゆくとて。
（十五ウ）
○日もおそくなりぬ。
なるさきにてゐるもの。
（ウ）
○こぞうもうちあそぶほどに。
らつきのうへにつきたるやうなるもの。
かきもちかきもちのやうなるもの。
もうわらうへうなるもの。
うすやうなるもの。
（廿一ウ）
○かきもちをやくなり。

花とやいふべからむ。本たてき本ゆりさえかゝらぬ風
ゆるむきてるるまゝ。
へらるゝ。
（廿六ウ）
○いかうほくゝみあるをいふ。
（ミ）
めてたしてかへるも。
（廿六ウ）
○山ぎはいとうすくなりゆく。
（五十五ウ）
もかゝやくまでもすらすのやうなるにさしあひて。
あつるはいもをむるとて。

はまでよせつけず
兄をうごかしおいやらふとするをも
口 七十四丁ウ 空の兄そのまま
○かまハずにくにくしくつきそふ
まゝにわるごころもしこ
口 百二丁オ 女三のまきまん
○よふうむいつやおゝむこまやう
たゞきなうたゞけだものやうなさまにつれ
にて兄をくるしめおりともおぼえず
ゐすゑまゝにけさやうなるのべつにくし
や、うみなむまくすゝ

うたくしげなて七八すんのこ
すゝかちよふとおもふうちもつるにて
おかくをゐつるうぎまなり
柏木ハナシ
○いかゞぐちもむさうなこゝろ
おくそぶうぐうぎたるやうにもあらず
もにてゐハぬそでをかきあはせ
そとさかちするいまやうのまきまき
あうねかくいふをくさなどゝ

おくもちして。なまめかしうおうしげなの。
（ロ廿九オウ）
○あそんのありすくるまをよせおもいでにそくさき人なお
そろくいうきやうにもてもろくつく。
（ロ廿一オ）
○女ねうそうちとみどれうざうそうやう
いつきそくうおうまきまくるすくれくめ
でたうしもおいさきいとあてなるうくて
いきやうづきまいそうをもとそいて
それとみてまみ思をなやなうおうおうげく

たりかしなでいまなどうまなをいねどろまつくし
（ロ廿四オ）
○きさきもやうそをるしくかをりおうしさいかざまうり
（ロ廿五オウ）
○あざやうよいでかきとめうるそうなまめい
をり。
（ロ廿四オ）
○あしすぐろいとあぎやうよてをけごちものく
ろうろうろうろうろうろうろうろうろうろうろうろ。
（横笛カ丁オ）
○ろうまこうまもものよかくれこもむの紅梅ねぶろ
ぜいとおくもどけなげよをやらねくねいと
あろうまくうろれ張つよきまーまくるきまは。

まいれとるしどいいとらうこげよもろくうぞやる。
柳をけづりくにそりをもむやうるりかこらも月
くさこくさいとさるよいろどりたこむこそちこく
につきうそくこう匂もまみのぞこよをづこう
うをうるるどは。るのうかいとぐよくおもも出こんど。
かしいとうやうよきいるるきそるさうり
りれをいろくかこらむこ。
夕雪巻四十九丁ウ
○るのそこきおどれるうよいろいまやるのる海ン
ぞけうちあいとけうこよすきこくかけよわこう。

夕日よ。さすぐよ。るよさ
ばりぜよわざとるくまる。
夕雪巻六十四丁オ 夕雪の巻氏宮のおまへ
○おまへにまるりこまる。
しぐ。
れとるよかいきてぐかり
つまあこるよこあてこ。
夕雪巻四十五丁ウ 源氏宮のそびうき
むまきうるあこるれさうるめれ。
ちるのよこと人れりぐくべさまこーおこと思うと

さこゆるべくあざやうよものさよげよわろうさろ
よ句をちしまつり抱おりもらねわろうぶの
かごろさをおいせびかくこふるところろうねむをと
のつりあつるおとわりろろ女さくろめてさろ
むかぐろをんをくもろおごろぎろんとろかみ
ろぐろおかぐし
（九注十一丁オ 紫式部集ろくろひもろさまと）
○おくようやせかろうりあへんとかくてこうあてよ
みまあろきおいとめろさうろあさもまきうりて。ゆんで
をろうりゆれときろかろおまう句もおかくあざく

少おいせろさうりは歩くせ世めの花めろうるもよ
うへろれあるをを。
なる花さろて。ろ
き。仙ろのろくお
ろ。

（白文九丁ウ）
○おれ君いまぐ
義雲
をあぐろるまと。
べくくと。せ世め人というくいでざうけるかろる
やとりるかと乃ろまつりかろうもろもろ

うこそとぃぃぞ
ゆるゆるさぶらぇ。あなさまとん
んけおくおかう
けりろぉぅぼ
まぐくうもみる
ほぜけおそぜ
べきょくちし心
〇かくかこんもろき
けくまもろき

るさかりくもさ
ぶそようづりけ
もの純白むをく
かけるみ柿けを
むるむとおかく
けるをりハかくし
なしかくるんま
竹川十五丁ヵ
〇姫ごさぃぃと
しみむくけよ

ぁやうけごろぅぃまりきま
ぁぃぃぃ

まゐさろくれおうるゞ山ゞおきるどゝおそうるよあをる
久ゝおゝをれるをくしきこうゞくるうさなうるゝすろうまぐ。
あいぎやうれこゞしかおけるやうよんゆるれゝめくなく
るゞどもらうくうさろをづうきけさくうむこまま
へつて、いまをとゐはう才紅梅よれぐいろよくゆのい
ゆゝれやうよたをくと見ゆつとうをゞやうよなままあう
うすこうるさまくおりうくんあうきけそをはま
さうまつれどゝおゝをやうるゆをいよるつとゞん
おりつゝ。

福姫六丁オ
つ姫君いらうくゝ。
おかとうくるらうくゝ。
さうもいとうをくゝ
推本ニ十三丁ウ
○くうさまあいやれうさまくゝ。
きるへんしどゝおれいまをつくうなまあきてあらんばゝん
ぐうさうおかゆゝかこゝくゝさるゝおちうだる
へゝすゑすこゝはうくゝろるうくゝあうひをい
だちくいとゆゝんゝをゝかゝうるやうなうむ
さうものこまかきるゝをゝこうるゝあつゝ

つきやせくるべ
ぬるく行ざそうろ
たるいとあむきや
。いうくおり
まつるさまいま
ひとをおか
しかちようし
がさるれ山里
にうち

くるまのそこにしく
早蕨三丁ウ
○いとさうに匂ひおかしくするものの
ミ
清うりのおりしもとりいでたるも
もいとあてやかなるまろうど
うちとけごとおびただしく
宿木廿八丁オ
○えびは女ぎみ
ミ
とぐにこころぐるしくもてなし
なるむとのやうぐ
ばうつきなど

たとかたてまつるを
てりのくしげ
にらうくしうす
よきむとくいたん
けうそうあまた
稽古なるまあ
花とみてまうか
かくれなるべ
あむつぐりむす

ほ十三オ
○さしてうすうあらん。
ほ十三オ
○さしてうすうあらん。
ほ十三オ
○さしてうすうあらん。

○枕冷上十二丁ウ
朝いとうるはしくもなかいまろんを花さき
ちるへくるこゝ

滅

○小八四十丁ウ
おもひごとをなへとかろくせかれ九丁オ
○そこそとなく滅
てこゝ
柏木廿九丁ウ
○いかでくしくもろきめとゆるきまく新しきばく
におとるまじめしうんめ。

人情

夕良十二丁ウ
りの情ありぬべきも、花もめうばよいなかやすう
はまりきるや、
紅葉賀廿七丁オ
○おとゝみるきすぐるまでかうりのどうちゆるめては
ちうんうろもおりてをこなるべしとおう
しやすゝ、
葵十丁オ
○ひまをやくへてあるいうふうきあをんせめう
なとくりのもまゝくたゞ沙
わけごろしくたゞ
にんあけくうちまの宮くるみよ洞のこゞふい

さまを見るついでいとぐち（廿四丁ウ）
○いとおそしげなる（若き人）
てあるうるさきまでけしきばみ
らるるにげるんぐるしげなる
りなくもてなすことかぎりなき（源氏若の巻）
見ゆれいとしたうとまをあるねとありそやりも
（廿五丁オ源氏玉の巻）
たるんとあやしきまでくうちまもりたまふ（若き人）
○いときようにげうちきくいでありさまをうつよ
（若き人）
ついめとくめくみいぐそうもう

川柱へかゝる花。
春よばれ松のあぢおそるゝけふ哉。

（若生十二オ）
○さてもかいもちりにくなきこれありさまをおいて
おかつるのくてすぐ
収たらうおがゆるをけふ
おりもうのみる。（廿丁オ）
○いう民家よかくるもげきなくよるにさゝしして
すぐのみん今きくをさりけるとわづか
んなさけなきもあり。
○（廿七丁オ）記うるしなくなるゆる
いく月ぬともあをれよやうるに多れ

あるさまもおかしければ、
（保氏云）
めぢろの云ふやうにて、ほどなく夜
もふけなれば、
○（廿一オウ）かくあやしきさまにて、おさおさなきまで、
（書物云名の女房の保氏云ふやうにて）
女だてもろくに、あるべきやうもなきを、
ろうぜさまくいかゞ。
（絵合五オウ、秋好中宮の）
○うへにいかゞ申しなさんとおぼしめし
れば、
○（廿二オウ）かくうつくしうおはしますを、
なでうさいはひをうしなひ
（書物云）

（書物云）
○風うちふきたる程よりもむひやうくとふ
ゆうの夜のさまおくしたるもあはれ
きなり、
（下十三オウ）
○あまぐもやいもすれば（吹の誤）
すれば、おちにくめをさまのごとくにて、そのちなう
さうめいするたのもし、
○（廿一オウ）たいのうへかくやうに月にうそぶきまさる
（書上云）

女三の宮へげんじのおのぐしをまいらせ給ふ。

あそこぶれかろくとおびしめわろをけ（巻二之五十日ヨリ）（ハおとといてすべ
き日をとゝ（日廿一丁オ）（榛木と女二之文ノ）
○さいれいとのんもかくてあそこ（榛氏ノ名）
ろくぬてうろ孫さは（女二之ノ文）
びておかせとわごはゆ
むまは女れはゆ（女二之ノ文）
久まもいてうろ（日廿六丁ウ）
○おとあれまを
なるむのとおが（巻二之五）

（巻二之五）

（榛氏ノ名。女二之ノ文ノ孫ノ名。）

（日廿一丁オ）
○さいれいとのんもかくてあそこぶれかろくとおびしめわろをけ（巻二之五十日ヨリ）（ハおとといてすべ
き日をとゝ（榛木と女二之文ノ）
○さいれいとのんもかくてあそこ（榛氏ノ名）
ろくぬてうろ孫さは（女二之ノ文）
びておかせとわごはゆ
むまは女れはゆ（女二之ノ文）
久まもいてうろ（日廿六丁ウ）
○おとあれまを
なるむのとおが（巻二之五）

（日廿六丁ウ）
○おとあれまをなるむのとおがさろんのちるどのあむいぼろこととおかし
だごあべてのせつもうきありきまをおかとろえ
さいとずくまなるものろうあさりくよいわろびのた
まむるろゆをむるどろおとさ申てんろうも。
あれまりのさろがろうきにはけきいちるうえ
いかん。
（日廿一丁オ）
○かくおやしさまぐ（巻二之五）

（榛氏ノ名。女二之ノ文ノ孫ノ名。）

るを。(自ラ)兵アてうれるんさどくうるでまくがし
くうしかいわざとろぼのすぐれるうしをしめ
るも。朝ゆかれおいとわざるあいせいとあ。おまくれお
栽にも。まいうもれをなどうもあむあさい。
世れをのかほる女房花。さをしれつまるすうる
籍れつゆよも。(ニ)ころうほしまでを
をわすく菊よおところへゆくあちちまりのけ
なきわれもかうるどいとすきまぎき裏かを
ころかむまぐ。おかしすてびるどわさとあさて。

にめぢるおりむをんたてくおれまうしけ
ロキュイオ
。わぎといまくてお
んくぐめるむてん。卯とれありきまをもんある人。
おくるこうあるべけれどおがてといつう
た。もてすーるいまあうしくおうさやうより
ざのこせさせくおとのんをけむたうおやくを
くりるしーみ。
拍板ニイウ
。あうさけ(ン)ちぐさりれ。うるきぞうれ。うさよれ
なぐさめてうこまるなくたのこからしたま

へ足。
（鏡角 四十九ページ 守護の人家の女房達。）
○さてりうたるさまにて。あざやかするにたれ名く。
まちつけくねをさしめむきつく。ありつうずとり
たくろむる女ども。佐こゆるされるとのまゝ。
（大ろう）足わくるむく姫ぎこわしもやうくさう置
ゆる方づうかでこをみれいやせくなりのく
ゆるはおのづくハ。人どもくわしあとやハ
おりへうろていもこびかやよむひかこをむ
きかけつく文どりたる不つくりはくてう

ちよるまゝおりわく外にくいまこいとあれがねぐ
ハあるくめもるもなゝ行とおがゆかいさる姫
しよやあんやうろてあるくて。足出てみたま
へ足。
○（六十八丁オ）はくしはうちるまびきくおれいでするかこうそ
バくりおけるまるあるずめてくく。
すこうも抱へたてるる人とおりむきたまつがと
抱ぶてよーのぶくこ
（ねえ）わづくされねえりのといおるとどむすびわく

るまうくらうすれ。
ロ七十二丁オ。
○さすがは中納言などゝ申ながらめでたのうきりみうきなりみとおもむるまゝ。
ロ七十二丁ウ大坂
○まわき腰おくちいとぐ世なたちとまるべうもおがくずをけりつぶるるおとぐくないあるねごおりみうん
ロ七十三丁オ
のこころぐるゝゆればきろぬやうまくれ旦つるをもめ
ぎこゝろのれおりみときれわさと同しうこれのはさ
まれいくらうくがゝみをまくうにくみうこ

まつるみおぐくれまうたるるでるぶちりがこう
うにくゝゆるをんやつゝおやれいとあもいと
めもかへすぐおりむいでうれもうくかなう
いつこにもくおいすぐるむうくもむかうよゝか
ういうくおおりみ
にぐるんてまいねよとおうむつゝけのよ
ロ七十三丁オ
の引孫めさこ風
くおさあぐりまうう

ふいろあもよがうそとさてこみそうみそし
たくんやうみそとおうとうをくそていさくう
りのおりおぐきさそもくしまくしぐ文其量
にんてまくる。いとうたりけおぐたるけさまてちけ其
わくうみそうさはのめさみんとかくうたまのまば。
大文の石
いとぐくくかるくきうむくうせあをて注いろで
いあんにもんをうむとおうをさくよちうんそ
まくねくくうみおぐくいうなさまの
（カ十三丁ウ
○ 泳をのくうきく日数経ればかかがそう

丈の大文のくそ
まのくそうそのう

れもくうとんぐくうあくていあくのうきよび
にんなまうくうをを女のくばかるくぐんうそうなんと
おのぐはくうねがんるくもよおぐくるもなま
うくうちかりはれいくもとのうまれを。
浦をもおさくく京にうそうちてんとおぐ其、
（白文の石
岩本廿五丁ウ
○ いのちものぐくて、いまくでもおぐらんれいをれお
カ文の石
りむくうおぐくうさをよもまるやうする
あうさまをなぐくるべきうくいおうそもとんる
かぎうくいんくびなきがんだくうのちうやう
（白文の石

やうおもてうすくぎてあり（そこどころ）
の男ぬうさ（そこら）ぞんかうおくかきうとおぢゆ
ふわざるりけり
（廿六丁オ本云のみ）
○えそこすら世となくうき
はさうともあれいぬ（ぬ）
をこそむうくれすてゐたるさへ
をゆくさ（ゆくさ）ぬうまかきこと
さぶわづんず（ず）おりもやうとなくうく
もあうなおのぞうなぐさめ

我ふなぐさめつ
（さしもやさぶすく）
山ぬそう月とて。

むことをおりつよさ（ざ）すて山ぬ月のこすみ
のぢうくおもつくるまうかやす
松ぐせぬきくるおとぬあうまかし山おろし。
おりむくうれいとのぢうなうかやす
さぬすまむうれいさよおぢぐて。ちぬ
業ぬおとまいおとうてゐぢゆ。
（中本）山里ぬまつぬうぐ
ぬうぐいなうきさてかくもうちいむ秋
（女房ども）きんとうぐいまそうぬやんん。
ぬうぐいなうきさてかくもうちいむ秋
きんとうぐいまそうぬやんん。

六兵衛かとの事也
さもあり行ふ
ふる

にさとやうりくもちのあれいかいんか
ナるのくわうおくていとくるとやからるをさんしもよ
うあうずさることあうまんまもたごまをおとそごとも
りむわるることうかしとがんさわざみり
ロ五十ウ
○うろろのきまくるけしうさりうまうとれるろとろる
（自ふた）
にもかれいごうことらくさうやまってわきも
れろくところうごの色やしきがおうろなうや
まことよいしさものやもちおうことるむうよいそう
うとこそものまうくうみまるくるまきさまれ

○批六

しまへれいえともうくこまてのこまむさしたく
かたそいはうしらくさきくしまうこのこまむさしたく
ロ五十四丁オ
○欠いおろうるのねにんざんれそこまろはれ
（自ふた）
いうでとおりおさくたんとおまるうちくれと
まくいいぐいおがしまむかさろもあくむとのと
かはそれてあうへせもこれいせむるのうちあうぐさ
ねきことというろりもうないねごとわうるる、
そんようごろさむくれてつのをりてあうぐくせ
はすぐいぐきのどおがしたろごうへおりかい

りめくさざまうろんでいときゝゝゝ揚を以て
たるさまゝゝみをくわゞたのうへおりむて
らうくらうけれとたゞうろよいたゞうとおりみをと
ちれうゝうさまゝゝをもれおよるくん
ゆるみ伝伝ともあもひざゞきさゝみゝをて
れてとかのこゝをあすくれもけいゞともな
ゞゝまゝわうやうるみ伝ゞもかかもちゝゞゞも
おうりわゞまくみれちきみのゞうゞくゞ人る
うちれ使ゝくまりゝゝあうりみとえちうく

まわうゞゞくゝなきゝゝをれにけいをと、あいんいゝゝ
そとゞうかくるがにあうゝおいすあるめでたさゝゝよう
おりみときいゞゞでゝきゝをとくとゞゝうゝさあてこ
世話そゞとりのうくゝゝそうのきおくさせたうむあ
さまゝさおれにあのさをからちを見しゞゝをな
そゞばうゝてもかやうゝ見ようんちゝといい
うゝかるべきわさうるとおりのよわゞぎゞゞきて
うつゝゝおいす女きゝみゞうゝ本すをゞて
おいするを、おゝやゝくゝ起るゞゞきゝてみゞうち

（相壺九丁オ）

懐旧

のおりもおりくまよ、さまざまこちなとゝもめでたか
ゝとゝんさせもするこゝろにめやすくこゝろみだこう
しおとうめぐいまうそ、おりいだるさまもあ〳〵されも
てるゆふべこうずけるうつこゝろ人うう
れもおもうるさけあり、だこゝろもうくれ女房な
ゞゝことひものむあうぐそかうそう
やとゝんてゝ、

（夕顔廿三丁オ）

○ゆふべまいまさせくゝれ高雄よおまーるどこうふと、
かうらんにはなむきうみくたちこまうちをそん
なるおくちしてさーかこれてとゞもゝ人もれにおもむ
いでゆり、

（末摘花十三丁オ）

○人ちれぬりれおりもれまぎれもゝはゝろれつゝせ
まるみさやうこまくまこ夏すゞぬ秋のこゝろおむも
（源氏ものがたり）ぎくよおゞーつけくかれさあこれおとるみくようき
くきこにくゝ色さ人ちむうおゞーゞこまで
にゝゝ

○月ぬさやうるむうかやうるをうりばあ
うむせさをるむくいまうくうりくるさをまも
なとおがいぼくおるーみくきぬうちるのくかれ
ふことおくかるー
（萬ノ）九くまくのきりやくぢるをぬうの月をそうく
おりむやうるみ。（仮名まくこ）
（巻七十八丁オ）
○さくくよいいくぐなぐろまるこうまくにくぐとお
（未稿系ニ系のこ）
はーけるよ。初うのもの多よまうやぬんをむければ、
○未稿系ニ系のこ
さうくいおをるぐうかあーくおがてうりあれうむ

ざーのそーはくむきにくおーのこをせくぐうこれおまし
（未稿系ニ系）
おきんをまうるたりくれむまみきよおれうる新
（萬葉上五十四丁オ）
○和つるくおゆ。
あいわよきおくそちぐくとおすくみさこえぬう
ちれありさまうをゆくせるとおがぐ
くくへいちうぐぬとまとうぐ
にな。

（式子ども多くは通世一ろんくゝ）

（うぐひすのとぶ音わもゞが水ぐきの法がみとゞめてきゝへる。）

和十二行本
○かゝる所よりうらみおこせてうめみるこゝち
（堂上の人）
うゝ一おさまりもけることなしとゞめさうなるよりふる
世ゝとくおぢすたゞ今ゝやうのすこうきなど
いまゝとせゝるこゝろよしゝ法べうけをゝずるぬべ
きまとおぢせいかゝるてうとうねむとゞ二三人
ぢうおまへくやらせ
日上
○かゝらねどのことゝすぎてむとの秋
ゝゝるハゝゝをまそのくかきくしろゝとゝ
わゝれねまくゝりおゝ法ゝ洞せうくろよりうれ

（源氏末）
ゝでゝやまあくまゝむとをちゝみとてゝをこゝつも
うゝをむともあまりくんよわゝーと兄をゝべきがゝ
ゝゝうちたるれバおゝやまをむく
ゝまでまゝな。
（白氏五丁オ）
○あゝゝのむとゝ法をあむきてねるくとゝろ
くゝつけても世ゝゝをけちたるやうなゝこと
もゝそゝるきなげきゝせぬとうみかりけり
（竹川日十二丁オ）
○かくいと草あゝくゝゝゝむぐゝゝゝなゝまぎ
（源氏末摘）
ゝゝまもまつむゝーゝゝあとをお

りむらてくれくるんなぶできあしもの。
（枕冊九丁ウ）○かくたへこそうめる野山はすもるむしとも
ものしたまそまきかいかぜおりむいできあしぬを
（八丁ウ）又しもとも宿もひかりなどもなくうまくせてそ我身
はきてのこうけんいはうむくおうくおうくや。
（宿本十九丁ウ末多角）○秋はぬそうはいまするこうろ
はれぐれまきうう
字治よりのしてをべうしも雁もまぐきてまこ

（懐紙）

ゆくよいつぐあしもとてくれ待つよたへぐ絶てとおくく
（源氏若のもと）るんよ院はうせのちにさ。世そうむきあむしのうくもれ。いをきあんうるまくうんをづりけふ。
ホくされるつけてもにくれてのこなんかつてもあるぐ
（五十六丁ウ）○おりあことをもおうずあろうまおほうしうむあ
たすべきむとれるきまこいよ姫君（ひめぎみ）をおりむいで
きてねそうる。

浮舟のおもく母のもとへ返事のこと

枝折ヰアウ
○さるまゝにきこえおとづれ
くるゝてまちにけるとぞ
れありさまいかゞ
けさ
むいぞるよむぢ
○けふ
めもあいのり
つまどまへ
いとあはぎ

かりあるまうりふまいをきこえんとところ
うかるべしとみる
我もまこうきたんめくしあるに
みうみをもはぜん。

紫文製錦 巻五